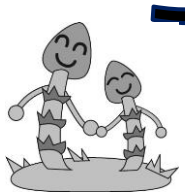
つくしだより



令和3年3月号

東京都精神保健福祉家族会連合会
（東 京 つくし会）
〒156-0056 世田谷区八幡山
3-33-1 林マンション301
TEL/FAX:03－3304－1108
http://www.ttsukush。sakura.ne.jp/
発行者 眞壁 博美

２０２１．３．１５ 第３６８号

東京つくし会の現状と課題

都連会長 眞壁 博美

今年度は、コロナ禍に翻弄された1年でした。思うように活動ができず、試行錯誤の連続でした。しかし、悪いことばかりではなく、パソコンで文書作りとメールしかできなかった私が、必要に迫られてオンライン会議ができるようになり、自宅にいながら多くの人とつながれる便利さを知りました。でも、オンライン会議はくたびれるし、直接話せる良さも改めて感じました。

少し時間的ゆとりができたため、東京つくし会の現状と課題について考えたことをまとめてみました。

★評議員会の日程と会場が変更に！

２０２１年度評議員会の会場を今年も、「烏山区民センター集会室」を６／18に確保していました。ところが、２月初旬に「ワクチン接種の会場として区が使うことになったので、大変申し訳ありませんが、貸すことができません」とお断りされてしまいました。新たな日程は６月１７日（木）、会場は調布市文化会館たづくり（映像ホール）です。

★東京つくし会の理事について

現在、東京つくし会の理事は13名と理事補佐１名がおります。私が当会の会長を続けられているのも、副会長をはじめ理事の皆さんにしっかりと支えられているお陰です。

しかし、理事の年齢構成を考えると、東京つくし会の理事会が持続可能か大変不安です。現在は、50代１名、60代１名、70代10名、80代１名という状況です。私も今年１月で71歳となりました。20年近く前には、「理事の70歳定年制」を議論していたことを懐かしく思い出します。その頃の規則から言えば、理事はたったの２名になってしまいます。

各家族会でも会長交代に苦労されていると思いますが、ぜひ若い方を都連に理事として送り出してくださるようお願いします。

★東京つくし会の財政問題について

「東京つくし会の登録会員が大幅に減り、会の財政基盤を揺るがす深刻な問題になっている」と議案書に載ったのが、２０１７年度評議員会でした。それから、ブロック会議で、財政問題の議論を行ったり、各家族会に財政に関するアンケートを実施しました。２０１９年度評議員会で「各家族会で毎年１人以上の登録会員を増やしてください」という御願いをしました。２０１９年度は、20名登録会員が増えました。しかし２０２０年度は登録会員数を増やしてくれる家族会がある一方で、登録会員数を減らす会と１家族会の退会があり、昨年度より20人減少し一昨年度の会員数と同じになりました。

今年度は、コロナ禍のために全国大会・関東ブロック大会の中止等により活動費等が減少したため、支出が抑えられました。しかし、根本的な財政問題にはなかなか手をつけられませんでした。

まだ、理事会でも議論されていないので、私の個人的な考えですが、会費収入の改善がなかなかされない状況の中では、「みんなねっと」のように、事務所の移転等財政支出に占める割合の大きい支出の削減などにも踏み込まざるを得ないのかなと思います。夢のない話で申し訳ありません。今後とも単会の皆様のお力をお借りしながら財政問題を考えていきたいと思います。

3月から障害者民間企業法定雇用率が2．3％に 2か月遅れの実施
～都内の就労支援事業の取組の紹介～

都連副会長 植松 和光

障害者法定雇用率は、2021年1月からの予定でしたが、2か月遅れの3月から実施されます。民間企業は2．2％から2．3％に、国・地方公共団体は2．5％から2．6％に、都道府県教育委員会は2．4％から2．5％にそれぞれ引き上げられました。

令和元年（令和元年6月1日現在東京労働局資料）の東京都内の民間企業における障害者雇用率は2％で7，467名が就職、うち精神障害者は3，763名が就職、就職希望者に対し33．3％となっています。しかし、実際働いてみての職場への定着や職種となると、それぞれ色んな事があるようです。

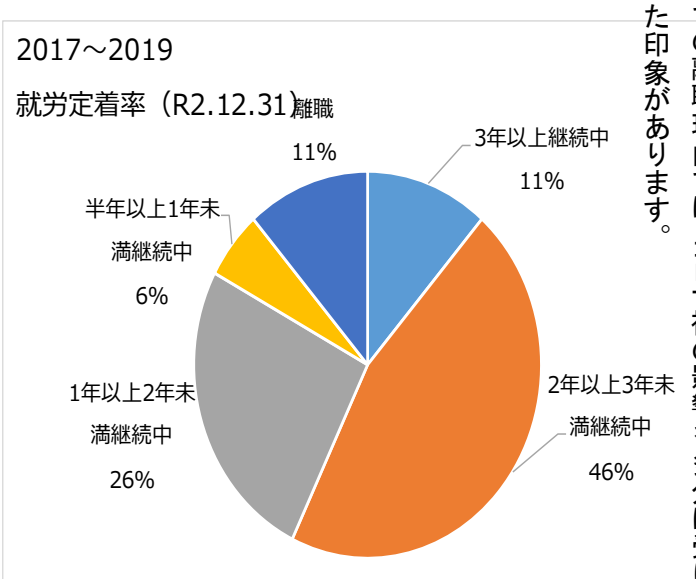
こんな、状況の中で、精神障害者の働きたい希望の人たちの就労を支援する事業所での数字から見た、実際の状況をお伝えします。

ここで紹介するのは、国立市にある社会福祉法人多摩棕櫚亭協会（理事長小林由美子氏）が運営する、「ピアス」という就労移行支援事業です。障害者が「働きたい」を「ずっと、働いている」を理念に主に精神障害の方（発達障害を含む）の一般就労に向けた働く力を身につけるために、準備訓練（トレーニング・プログラム・職業実習等）をオーダーメイドで提供しています。

2017～2019年の間にピアスを利用して就職をした人は35名でした。

その35名の現在（R2.12.31）の就労定着1年以上継続が約9割、2年以上が約6割となっています。35名中6名が転職をしていました。チャレンジ雇用から一般就労へステップアップしたり、職場とのマッチングの問題で早期に判断し転職をしたり、との理由が挙がっていました。いずれも現在は安定就労されています。

35名中4名が離職していますが、今年度に入っての離職理由では、コロナ禍の影響を多分に受けた印象があります。

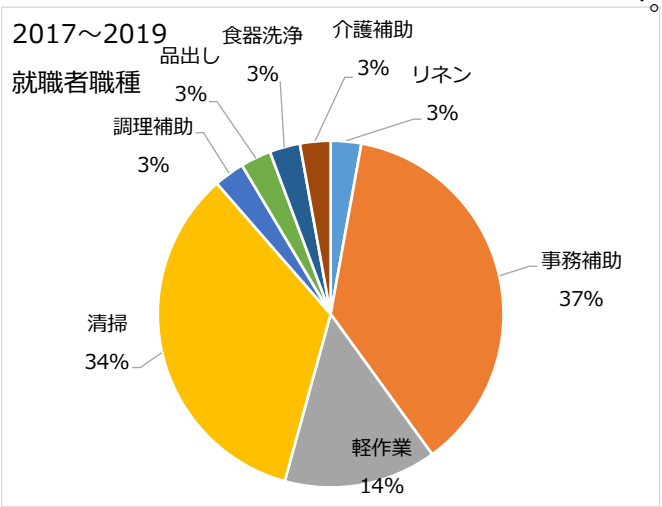


ピアスの就労トレーニングには、弁当宅配部門環境整備部門、事務補助部門があります。いずれも実践的な作業を通し、気づき→振り返り→取り組む、を繰り返しながら、自分の得意不得意を確認していきます。

そのため、「就職先はその職種のみで就職ですか？」という質問を受けることがあるのですが、そうではありません。

確かに、左図就職者職種を見ると、トレーニングで経験し自信が持てる職種を選んでいる方は多いかもしれません。

しかし、ピアスで行った作業内容で職種を選ぶのではなく、作業を通して「体を動かすのが好き」、「黙々と作業を進められるのが得意」、「人と関わる仕事にやりがいを感じる」等々の気づきから職種を選んでいくのを大切にしています。『しっかり準備をして長く働く』、これがピアスの就労支援です。



社会福祉法人多摩棕櫚亭協会ピアス内はれのちくもり編集委員会の許可をいただき一部を抜粋し掲載させていただきました。

『共感を下敷きに添える対応』

都連副会長　中住　孝典

『人は他者から共感されていることが伝わるとその相手に対して心を開くことができます。一方で人が苦しいのは今と共に未来への不安。そのことからも過去への事柄へ折り合いをつけながら未来に気持ちを向けたいのです。とはいえこんな話をすると「それは同じ立場の人同士しかできないことでは」という声が聞こえてきそうですがそんなことはありません。例えば専門職が「お母さんこれまでよく頑張ってきましたね」とまずは受け止めるのです。このように、共感を下敷きに添えることによって未来への発信の言葉は相手に伝わりやすくなるといえるでしょう。不思議とこれらの関わりを続けると伝える側と伝えられた側の間に共感を通して信頼関係が芽生え、つながりができるのです。』これは「みんなねっと」２０２０．９月号掲載のみんなねっと理事・青木聖久氏の文章からの抜粋です。私達の例会を中心とした家族会活動、家族による家族のための相談会の大切な意義もここにあります。「共感を下敷きに添えた対応」です。特に相談会では、誰にも打ち明けられず心細い心境の中で相談に来られるご家族も少なくありません。共感をもって話を聞いてもらえることがどれほど相談者を安心させることにつながるでしょう。大波に突然ほおり込まれた小舟のような心境のご家族にどれだけ「大波は乗り越えられる！」と勇気と希望を与えることにつながるでしょう。ご家族には実体験がありますから結果的には今困っているご家族の問題の軽減につながるような知恵や知識を伝えられることもあります。でも相談会の一番大事な役割、肝の部分は「共感」を通した受け止めです。藁にもすがりたい思いで来られるご家族の中には相談会がすぐ問題の解決につながらない場だと思うと、一回だけで関係が途切れる事も少なくないでしょう。それほど悩みや問題が深刻だからです。でもあきらめずに共感を下敷きにした相談会を続けていくと、伝える側と伝えられる側の間に共感を通した信頼関係が芽生え温かみのあるつながりができるものです。人は多少時間がかかっても最終的には自分の力で歩いていきます。でもそこに辿り着くまでがなかなか大変です。辿り着くまでの道のりに「共感」を下敷きに添えた伴走がどれほど勇気や元気を与えるエールになることでしょう。家族も専門職も共にこの共感性を高め、相談支援の充実に向けられればと願っています。

巣ごもりから見えてくるもの

都連理事　鬼頭　博子

昨年２月から巣ごもりに入りその後まもなくマスクを２枚装着し、緊急事態宣言を出す出さない、解除するしない、二転三転する国の方針に忸怩たる思いを持ちながら、自分なりの「移らない移さない命は自分で守る」生活を継続中です。また時期を同じくして突然夫が起き上がれず一歩も歩けなくなりました。すぐに大病院へ行くべきなのでしょうが頑として「行かない」と言い張る姿に同調し、以来いつでも一緒暮らしです。大田区はかなり早い時期にダイヤモンドプリンセス号の乗船客を収容しました。未知の伝染病は他区が思う以上に緊張感で一杯、その後さまざまな情報、諸外国の猛烈な勢いで増加していく感染者の数にとても「コロナと共に」などに応じる気持ちになれませんでした。老夫婦だけなので巣ごもり感染対策暮らしは意外とスムーズです。

一方、歩けなくなった夫はどうなったかというと、町の主治医の診断は体重過多と運動不足。とにかく体重を減らすためにも「歩け」と言われ大事には至っていませんが「歩かない」太った老犬の散歩と一緒。本人曰く居間に介護ベットとコ・ボレーヌ（別名尿瓶）を置きたいと言い出され、仰天した私は優しさをスパルタで表現し、何はともあれはじめの一歩、心を鬼にして抵抗する老犬を散歩に連れ出しました。多摩川土手の散歩コースは定番でしたが、先日やっとその半分までを歩けるようになりました。老化は完全に元通りにはならないようですが、どんな姿でもまた一緒に歩けて幸せです。

キラキラ輝く川面とこんな言葉「人間誰しも善悪美醜をないまぜに生きている。互いに欠点だらけながら、誰の中にもある人間の素晴らしさが作用し合って社会を進めていく」に、希望と勇気を感じています。

「狛江さつき会」訪問

都連理事　安藤万寿代

狛江精神保健福祉家族会「狛江さつき会」は１９８８年５月に設立して、今年で３３年になります。年間行事で年二回講演会を開催します。講演会の案内は狛江市の広報紙に記載され、広く市民の皆様へ呼び掛けています。

２月２３日（火）１３時３０分～１６時まで渋谷太陽の会会長・東京つくし会副会長の本田道子氏をお招きして開催しました。

テーマ「様々の障がいを持つ家族と共に生きる」～地域で安定した生活を～で、ご家族の方々との関わりをお話しして頂きました。

当初、なぜ我が家がこの様な状態を受けなければならないかと思われていたそうです。先ず、ご主人様が視覚障がい者・娘さんが知的障がい者・息子さんが統合失調症とのことですが、とても明るく話されましたことが印象的でした。本田さんご自身が大学で福祉を学ばれて、新宿区役所の福祉課でお仕事をされ、それが現実に役立つとは思いもしなかったそうです。大学ではおかしいと思ったらおかしいと説得していく、運動をしていくことを学ばれて、「隠さない」「言葉で訴えていく」「言葉で世の中を変えていく」「人は失敗する権利がある」「親も自立しましょう」と話されました。娘さん・息子さんはそれぞれ自立され、現在はご夫妻二人生活とのことです。昨年、コロナウイルス感染の体験をして、軽いので自宅待機を余儀なくしました。皆さんへ隠さないで話したため、多くの方々からドア越しに食材を入れて下さり、沢山助けていただいたそうです。

講演会の当日は、多くの家族の皆様や当事者の皆様もご出席して下さり、本田さんのお話しを涙ながらにお聞きしていました。ご家族に様々な障がいを抱え支えながら元気に活動しています本田さんのお話しは、私達にも明日を生きる力が生まれ、家族の方々への関わり方が変わりました。ありがとうございました。

☆講演会のお知らせ☆

○３月２５日（木）１４時～１６時
「ひきこもり」の理解と社会参加
講師　白梅学園大学子ども学部教授
　　長谷川　俊雄氏
会場　赤羽会館　大ホール　申込不要
主催　東京都・都精民協☎03-3304-1108

○４月３日（土）１３時３０分～１６時
「みんなでやろう家族ＳＳＴ」
講師　高森　信子氏　　申込不要
会場　二幸産業・ＮＳＰ健幸福祉プラザ５階
主催　サンクラブ多摩　☎042-371-3380

○４月１０日（土）
「精神疾患と健康ー体の病気の管理と入院」
講師　精神科医・大泉病院社会医療部長
　　山澤　涼子氏
会場　新宿区立障害者福祉センター
主催　新宿フレンズ　☎03-3987-9788

編集後記

三月六日やどかり研究所交流集会があり、久しぶりにリアル集会に出かけた。

やどかりの里は昨年五十周年を迎え新しいプロジェクトに取り組んでいる。創立時の谷中輝雄（やなかてるお）理事長の「精神障害者のごく当たり前の生活を求めて」活動することを基本理念としてきた。そして今、「ＳＤＧを意識したソウシャルファームづくり→誰ひとり取り残さない地域を目指して」に取り組みだした。

今回の発表会で、最後の報告者として登場したのが、**結城俊哉**立教大学教授であった。やどかりの里の谷中氏との交流で、精神疾患患者を「病者」とか「障害者」としてではなく「生活者」として理解する方法を考えた。ケアの現場の担い手として、医療モデル、社会モデルでなく「生活モデル」に視点を据えて、その生活モデルの担い手として、**臨床力**を持つことを提言している。臨床力とは、「自分＋他人＋当事者」の内在する力を引き出す力と定義されている。内容として、相手の変化を信じる力、命・その人らしさ・人権感覚を尊重できる者等と新しいソウシャルファームづくりのハードルはかなり高そうだ。

その中で、家族会の役割を考える必要を感じた。

都連理事　松沢　勝

つくしだよりは赤い羽根共同募金の配分を受けて発行しています。